

リスクマネジメント

リバーフロント研究所長 横内 秀明



リスクマネジメントの日本語訳が危機管理だが、私には、危機管理は危機の語感から、地震とか台風などの大きな自然災害や国家間の争い事のような危険に対して、どう対処するかのイメージがある。一方、リスクマネジメントは、企業などの組織や団体などに内包あるいは降りかかる危険にどう対応するかをイメージする。今回、凶らずも、リスクマネジメントを、身をもって実施体験する事になった。

第3回世界水フォーラムの安全対策

このフォーラムは、平成15年3月16日から23日の8日間に、当初見込みで世界の約150カ国から約8000人が集い、国内外の皇室、元首など超VIPも参加するという大きな国際会議である。この水フォーラムの分科会会場は京都府、大阪府、滋賀県の3府県に分散し、会場は5つの会議場やホテルが予定されていた。

この会議は、参加料を払えば誰でも参加できるという、全ての人にオープンなフォーラムをその基本としている。この為、この基本を守りながら、安全で安心して、フォーラム開催中、議論してもらえるような環境を創らねばならない。

そこで、まず、リスク予防として、入り口で、本人と持ち物のチェックを徹底するため、参加人数と集中する時間帯から、金属探知器、X線の数を見積もり、一般参加者、報道機関、超VIP、スタッフ用に出入り口を分離し、それぞれに探知機を配置した。しかし、これをいかに厳しく行っても、リスクがゼロになる訳ではない。プラスチックや横断幕など、金属探知器や、X線をすり抜けて持ち込むことが可能な物を使い、参加者が会議を妨害し、また、爆破予告等のいたずら電話などで、フォーラムを妨害或いは混乱させ、新聞、テレビなどを賑わすことは可能であり、このための対応が必要になる。開会式のように、プログラムを粛々と進めることが目的の一つになっているものについては、会場内での妨害を直ちに阻止できるような体制を敷き、一方各セッションは、色々な立場の人が、議論をするのが目的であり、会の運営は、全てセッション開催側に任せ、警備側はよほどのことがない限り立ち入らないという立場をとった。実際、全体で、350を越えるセッションが開かれることとなり、全ての人々が、水に関するあらゆる議論をすることが可能な中で、会議を妨害した場合は、妨害した者がかえって輦轡を買うだ

けになるという抑制効果が働き、結果として妨害行為が少なかった。

不審物発見や、爆破予約などのいたずら電話に対しては警察など関係者と密接な連携を取り、特に爆破予告電話については、その信憑性の確率は低いものの、万一に備え、行啓時には、警察が、自動録音と逆探知を行うこととなり、フォーラム事務局は、それ以外の時間に録音装置を付け電話を集中管理し、リスクがゼロと判断されない限り、セッションを中断して避難誘導ができる体制を敷いた。

また、リスクに対する即応体制を整える際、現場の状況の正確な把握が欠かせないが、主要な会議場や屋外に監視カメラが設置されていたことと、映像付き携帯電話を併用したことが大いに役に立った。

蓋を開けてみて、予想を遙かに超える外国人6000人を含む約24000人の参加者を得てその成功を喜んだものの、安全確保の観点からは、その体制の緊急の見直しに、悪戦苦闘したというのが実態である。

誰のためのリスク管理かを常に見極めながら、状況に合わせた確に対応しなければならないにもかかわらず、開催中その考え方の違いから現地警察との協議に多くの労力が割かれたことは、残念といわざるを得ない。

さらに、期間中イラク戦争が勃発したこともあり、海外を含む多くのマスコミがそれまでの安全対策やその変更について、聴取に来たが、首尾一貫している安全管理方針を説明し、納得してもらった。マスコミ対応も十分念頭におく必要がある。

リスクマネジメントの重要性

デフレによる経済危機が続く、今、社会全体が一種の閉塞状態に陥っている。厳しい国際情勢の中で、テロは何処でも起こる可能性がある。また、日常生活では、安全を標榜するマンションが、いとも簡単に侵入され、泥棒の標的になり、地下鉄に乗っていても、いつ大惨事にならないとも言えない。我々は、いかに大小の危険と隣り合わせで生活しているかである。

さらに、利益を得るためには、経済的リスクが伴う環境の中で、仕事をしなければならない。今回経験したような安全確保の観点のみならず、多くの事業で益々リスクマネジメント、所謂危機管理が必要になることは確かである。